

天台智顛の「四種四諦」について

JI WENJIE

はじめに

天台智顛（538-597）の「四種四諦」説は、基本的に『勝鬘經』と『涅槃經』を根拠として「四種四諦」の教義を組織している⁽¹⁾。しかし、『勝鬘經』と『涅槃經』に説かれた四諦説は、四種類に分類されているわけではない。智顛が自身の「四種四諦」の考えを組織するに当たって『勝鬘經』と『涅槃經』とに依拠したのは何故であろうか。智顛以前、淨影慧遠（523-592）は『勝鬘經』によって「四種四諦」を立てている⁽²⁾。前代の『涅槃經』注釈者たちは『涅槃經』によって四諦の意味を空と理解している。智顛はこれらの先蹤を踏まえ、『勝鬘經』と『涅槃經』にしたがって自身の「四種四諦」を形成するようになる。

本稿は、『勝鬘經』と『涅槃經』に見られる四諦説に注目し、智顛がどのように両經に基づく自身の「四種四諦」を理解しているか、という問題を考察することを目的とする。

智顛の四諦解釈に関してすでにいくつかの先行研究において検討されてきた。例えば、鹽入（1964）は「四種四諦」の名称が『勝鬘經』から出ていると指摘している。さらに「四種四諦」の内容は『思益經』で説かれる天台の「四種四諦」に近いと考えている⁽³⁾。加藤（1990）は、智顛の「四種四諦」の教義内容が『涅槃經』の聖行品だけではなく、『思益經』や『中論』に説かれる四諦を拠り所⁽⁴⁾にしている。齋藤（1991）は加藤の研究を踏まえて、『四教義』と『法華玄義』では、「四種四諦」という名称の典拠である『勝鬘經』の四諦の扱い方が違うと指摘している⁽⁵⁾。

これまでの研究成果の中では、智顛自身の「四種四諦」の成立に与えた經典の影響について取り扱われているが、筆者はさらに、智顛自身が指摘した「四種四諦」の根拠である『勝鬘經』と『涅槃經』に見られる四諦説

から、智顛がどのように両經を受容し、そして自身の「四種四諦」を形成しているかということについて検討していきたい。

智顛は『勝鬘經』と『涅槃經』の注釈書を書いていないが、両經の引用がある。智顛は『勝鬘經』で四諦義を比較しながら、取り上げている。一方、智顛は『涅槃經』で、自分自身の「四種四諦」の所依としながら、四諦義を取り上げている。

以下、第1章では、『勝鬘經』の四諦説について、『勝鬘經』の經文に沿って、四諦の意味を考察する。第2章では、『涅槃經』の四諦説について考察するが、適宜智顛の四諦義に言及する。第3章では、『四教義』の「四種四諦」を中心として、智顛がどのように両經の四諦義を理解しているかを明らかにする。

第1章、『勝鬘經』における四諦説の思想基盤

『勝鬘經』における四諦説に関する解説は、何箇所かあるが、基本的に如来蔵という課題のもとで説かれている。しかし、いずれも如来蔵の考えで四諦を説明しているが、如来蔵を持っている功德によって、四諦についての説明の仕方は異なっている。基本的に三つの場面がある。第一に、如来蔵の言葉を出る前に、一乗思想に基づいて二乗が「聖義」を持っている四諦を説き、如来が「聖諦」を持っている四諦を説く（「一乗章」・「無辺聖諦章」・「如来蔵章」の内容）。第二に、如来蔵に対して、煩惱蔵があり、如来蔵と煩惱蔵によって、二種の四諦を説く（「法身章」の内容）⁽⁶⁾。第三に、空如来蔵と不空如来蔵によって、四聖諦の中で滅諦だけ仏の第一義であることを説く（「空義隱覆真實章」・「一諦章」・「一依章」・「顛倒真實章」の内容）。

『勝鬘經』の「一乗章」は、一乗思想を前提に、二乗の涅槃を有余涅槃

としている。二乗の涅槃は有余涅槃であるから、二乗が理解した四諦も完全な四諦ではない。これに対して、「一乗章」では完全な四諦もあることが指摘されている。『勝鬘經』の「一乗章」には、次のように説かれている。

阿羅漢、辟支仏、最後身菩薩は、無明住地の覆障する所と為るが故に、彼彼の法に於いて不知にして不覚なり。知見せざるを以ての故に、応に断ずべき所をば、断ぜず究竟せず。断ぜざるを以ての故に、有余の過の解脱と名づく。一切の過を離れたる解脱には非ず、有余の清浄と名づく。一切の清浄に非ず、有余の功德を成就すと名づく。一切の功德には非ず。有余の解脱と、有余の清浄と、有余の功德とを成就するを以ての故に、有余の苦を知り、有余の集を断じ、有余の滅を証し、有余の道を修す。是れを少分の涅槃を得と名づく。少分の涅槃を得たる者は、涅槃界に向かうと名づく。若し一切の苦を知り、一切の集を断じ、一切の滅を証し、一切の道を修すれば、無常にて壞ある世間と、無常にて病ある世間とに於いて、常住の涅槃を得るなり。覆護無き世間と、依無き世間に於いて、護と為り、依と為る。何を以ての故にとならば、法に優劣無きが故に涅槃を得、智慧の等しきが故に涅槃を得、解脱の等しきが故に涅槃を得、清浄の等しきが故に涅槃を得るなり。是の故に、涅槃は一味にして等しき味なり、謂く解脱味なり⁽⁷⁾。

ここで涅槃の観点から言えば、阿羅漢・辟支仏・最後身の菩薩は、無明住地の煩惱に覆われている。これらの三者が得た四諦は有余涅槃から得られる有余の四諦である。これらの三者が得た有余の四諦以外に完全な四諦がある。すなわち、有余の四諦と完全な四諦という二種四諦が指摘されている。「無辺聖諦章」では、完全な四諦を目指そうとする、二乗の四諦は「聖義」と言えるが、「聖諦」と言えないとある。二乗の「聖義」を持ってい⁽⁸⁾

る四諦に対して、「聖諦」を持っている四諦は、如来が無明蔵世間に開現した四諦である。「聖諦」を持っている四諦は、「如来蔵章」によると、「(如来は如来蔵の処に、聖諦の義を説く)⁽⁹⁾」ことである。

以上のように、如来が如来蔵のところから四諦を説くことは、「四聖諦」と言え、完全な四諦と言える。ここで「(如来)は如来蔵の処に、聖諦の義を説く」ということにしたがって、完全な四諦と不完全な四諦の二種の四諦があることを指摘している。さらに、如来蔵に対して、煩惱蔵があって、如来蔵と煩惱蔵の二面によって、二種の四諦を説く。

『勝鬘經』法身章で、私は二種類の対象のため、二種四諦を説く。⁽¹⁰⁾第一に、無量煩惱蔵が所縛する如来蔵を疑惑しない対象のため、私は作四諦を説く。第二に、無量煩惱蔵から出される法身に疑惑することがない対象のため、私は無作四諦を説く。具体的に作四諦と無作四諦の説明は、次の通りである。

作の聖諦の義を説くとは、是れ有量の四聖諦を説くなり。何を以ての故にとならば、他に因りて、能く一切の苦を知り、一切の集を断じ、一切の滅を証し、一切の道を修するには非ず。是の故に、世尊、有為の生死と無為の生死と有り。涅槃も亦た是の如く、有余と及び無余とあり。無作の聖諦の義を説くとは、無量の四聖諦の義を説くなり。何を以ての故にとならば、能く自らの力を以て、一切の受の苦を知り、一切の受の集を断じ、一切の受の滅を証し、一切の受の滅の道を修す。是の如きの八聖諦、如来は四聖諦と説く。是の如きの四の無作の聖諦の義は、唯だ如来・応等正覚のみ、事として究竟せり、阿羅漢と辟支仏は事として究竟するには非ず、何を以ての故にとならば、下と中と上の法は、涅槃を得るに非ざればなり。何を以ての故にとならば、如来・応等正覚は、無作の四聖諦の義に於いて事として究竟せり。一切

の如来・応等正覚を以て、一切の未来苦を知り、一切の煩惱上の煩惱を断じ、一切の集に摂受せられ、一切の意生身を滅し、一切苦を除いて滅を作証す。世尊、法を壊すに非ざるが故に、名づけて苦滅を為す。言う所の苦滅とは、無始・無作・無起・無尽・離尽・常住・自性清浄にして、一切の煩惱蔵を離れたるに名づく。世尊、恒沙を過ぎたる不離・不脱・不異・不思議なる仏法の成就するを、如来の法身と説く。世尊、是の如きの如来の法身は、煩惱蔵を離れざるを如来蔵と名づく。⁽¹¹⁾

作四諦とは、有量四聖諦を説くことである。有量四聖諦とは、阿羅漢・辟支仏・最後身の菩薩が知っている四聖諦である。なぜなら、不思議変易生死の意生身が残っている阿羅漢・辟支仏の涅槃は、有余涅槃であるので、「有量」だからである。⁽¹²⁾ 無作四諦とは、無量四聖諦を説くことである。自身の力によって、受け取られた四聖諦は、「無量」である。⁽¹³⁾ 無作四諦は、仏如来が如来蔵から究竟した四聖諦であり、阿羅漢辟支仏が究竟したものではないのである。これに対して、阿羅漢・辟支仏と最後身の菩薩は、仏に比べて、一切煩惱蔵を離れていないから、理解した作四諦以外に、無作四諦を理解していないのである。

一切煩惱蔵を離れてから如来法身があることにしたがって、如来蔵で理解している四諦は、一切の未来苦を知り（苦諦）、一切煩惱上の煩惱が摂受する一切集を断じ（集諦）、一切意生身を滅し（滅諦）、一切苦滅を除くことを証す（道諦）。如来蔵で理解している苦滅（滅諦）は、壊法の滅ではなく、一切煩惱蔵を離れて、不思議仏法を成就する如来法身ということである。後述の如来蔵の空智によれば、不思議仏法を成就する如来法身は不空如来蔵の特徴を持っている。⁽¹⁴⁾

ここで注意すべきことは、一切煩惱蔵を離れて、不思議仏法を成就する如来法身の場合、無作四諦は仏の四諦の一部であり、完全な仏の四諦では

ないということである。仏の四諦は何かという問題について、空如来蔵と不空如来蔵の二側面から論ずれば、四聖諦の中で滅諦だけが仏の第一義である。『勝鬘經』「空義隱覆真實章」は、次の通りである。

世尊、二種の如来蔵の空智有り。世尊、空なる如来蔵は、若し離、若し脱、若し異なる、一切の煩惱蔵なり。世尊、不空なる如来蔵は、恒沙を過ぐる、不離・不脱・不異・不思議の仏法なり。世尊、此の二空智は、諸の大声聞、能く如来を信ずることによる。一切の阿羅漢と辟支仏の空智は、四不顛倒の境界に於いて転ずるなり。是の故に、一切の阿羅漢と辟支仏は、本より見ざる所、本より得ざる所なり。一切の苦滅は、唯だ仏のみ証することを得。一切の煩惱蔵を壊し、一切の滅苦の道を修せり。⁽¹⁵⁾

如来蔵の空智には二側面がある。第一に、一切の煩惱蔵を離れた空如来蔵である。第二に、恒沙より多くの不思議仏法を持っている不空如来蔵である。⁽¹⁶⁾ 二乗の空智は、凡夫と外道の常・楽・我・浄の四顛倒に対して、無常・苦・無我・不浄という四不顛倒に転化している。また、仏の常・楽・我・浄に対して、「本所不見、本所不得」ということになる。

如来は空如来蔵と不空如来蔵の智慧を持っている。一切の煩惱蔵を離れた空如来蔵においては、滅諦のみが仏の四諦（一切苦滅、唯仏得証、壊一切煩惱蔵）である。これに対して、二乗は如来蔵の二側面ある空智を持っていない。したがって、仏は二乗のため、如来蔵の二側面ある空智を指摘し、さらに、空如来蔵によって、滅諦のみが仏の四諦であることを示す。

以上によって、『勝鬘經』の四諦は、如来蔵の効能によって、作四諦（二乗の四諦）・無作四諦（不思議仏法を成就する如来法身である四諦）・第一義諦（滅諦のみ仏の四諦）の三種の四諦が見られる。

『勝鬘經』の無作四諦に対して、智顛は『四教義』で自身の無作四諦を説明する際、「『勝鬘經』に無作の四諦を明かす。一実の結成無し。『涅槃經』は無作と云わず、皆一実を用って四諦を結成す。義既に相関す。今兩經を合して名を立つ。故に無作の四実諦(17)と言うなり」と示している。さらに、智顛は『法華玄義』で『涅槃經』の第一義諦と実諦によって、自身の無作四諦の根拠とするが、『勝鬘經』の「滅諦のみが仏の第一義諦である」という考えを批判している。次に『涅槃經』の四諦説を検討する。

第2章、『涅槃經』における四諦説の思想基盤

智顛の「四種四諦」に、影響を与えた『涅槃經』の四諦説は、「聖行品」に散見されている。南本の『涅槃經』の「聖行品」は、「聖行品第十九之一」・「聖行品之二」・「聖行品之下」という三つに分かれている。智顛は、「聖行品之二」に基づいて自らの四諦説を組織した。そこで以下、「聖行品之二」の四諦説に注目して、『涅槃經』の四諦説について論じることにした。

「聖行品之二」において、二つの面で四諦を説いている。第一に、凡夫・二乗・菩薩・仏に対して、それぞれに四諦を観察した後、得た真理が異なることを示している。第二に、『涅槃經』で説かれる二種智によって、四諦の相が異なっている。まず、四諦を観察する主体に対して、四諦の真理は何かということについて、『涅槃經』「聖行品之二」には、次のようである。

諸の凡夫の人は苦有りて諦無く、声聞と縁覚は苦有り苦諦有りて、而も眞実無し。諸の菩薩等は、苦を解して無苦なり。是の故に無苦にして、而も眞諦有り。諸の凡夫の人は集有りて諦無し。声聞と縁覚は集有り集諦有り。諸の菩薩等は集を解して無集なり。是の故に無集に

して、而も真諦有り。声聞と縁覚は滅有るも真に非ず。菩薩摩訶薩は滅有り真諦有り。声聞と縁覚は道有るも真に非ず。菩薩摩訶薩は道有り真諦有り。⁽¹⁸⁾

『涅槃經』における「苦諦」は、「苦」が苦しみということであり、「諦」が真理ということである。⁽¹⁹⁾ 凡夫は苦しみだけを受け、苦しみの真理である「苦諦」を知らない。凡夫に対して、二乗は苦しみの真理である「苦諦」を知っている。しかし菩薩に対して、二乗は真実の「苦諦」を知らない。⁽²⁰⁾ 凡夫・二乗に対して、菩薩は苦しみがなく、「苦諦」の真実が知られる。

『涅槃經』における「集諦」は「集」が「還りて有を愛するなり」ということである。⁽²¹⁾ 凡夫は集があり、「集諦」の諦理を知らない。凡夫に対して、二乗は集があり、「集諦」の諦理も知っている。二乗に対して、菩薩は集がなく、「集諦」の真諦も知っている。⁽²²⁾

『涅槃經』における「滅諦」は、無漏果ということである。⁽²³⁾ 二乗には「滅諦」がある。菩薩に対して、二乗の「滅諦」は、無漏果であるが、真実の「滅諦」ではない。二乗に対して、菩薩の「滅諦」は真実を持っている。

『涅槃經』における「道諦」は、無漏因ということである。⁽²⁴⁾ 二乗には「道諦」がある。菩薩に対して、二乗の「道諦」は真実の「道諦」ではないが、菩薩の「道諦」は真実である。

二乗に対して、菩薩の「滅諦」と「道諦」の真実は何かということについて、『涅槃經』には以下のようにある。

善男子、云何が菩薩摩訶薩は、大乘大般涅槃に住して、滅を見、滅諦を見るや。所謂る一切煩惱を断除するなり。若し煩惱断たば則ち名づけて常と為す。煩惱の火を滅せば則ち寂滅と名づく。煩惱滅するが故に、則ちに受樂を得。諸の仏菩薩は因縁を求むるが故に、故に名づ

けて浄と為す。更に復た二十五有を受けざるが故に、出世と名づく。出世を以ての故に、故に名づけて我と為す。常に色声香味触等、若しは男、若しは女、若しは生・住・滅、若しは苦、若しは楽、不苦不楽に於いて相貌を取らざるが故に、畢竟寂滅なる真諦と名づく。善男子よ、菩薩は是の如く大乘大般涅槃に住して滅聖諦を觀ずるなり。

善男子よ、云何が菩薩摩訶薩は、大乘大般涅槃に住して道聖諦を觀ずるや。善男子よ、譬えば闇中に燈に因りて麤細の物を得るが如し。菩薩摩訶薩は亦た復た是の如く、大乘大般涅槃に住して、八聖道に因りて一切法を見る、所謂る常・無常、有為・無為、有衆生・非衆生、物・非物、苦・樂、我・無我、浄・不浄、煩惱・非煩惱、業・非業、実・不実、乘・非乘、知・無知、陀羅驪・非陀羅驪、求那・非求那、見・非見、色・非色、道・非道、解・非解なり。善男子よ、菩薩は是の如く大乘大般涅槃(25)に住して道聖諦を觀ずるなり。

菩薩の真実の「滅諦」は、大乘大般涅槃の教えによって、常（一切煩惱を断じること）・樂（煩惱がなくなった後、樂を得ること）・我（二十五有を受けず、出世することを我と名付く）・浄（諸仏・菩薩が因縁を求めることを浄と言う）ということである。相貌に執着しない畢竟寂滅ということである。

菩薩の真実の「道諦」は、真実の「道諦」を求めるため、一切法を常無常・苦樂・我無我・浄不浄というように見ず、これらの不二の相を觀察することである。

以上のように、『涅槃經』に見られる四諦説は、有漏と無漏によって、凡夫と二乗の四諦を区分している。真実であるかどうかによって、二乗・菩薩・仏の四諦が異なる真理を持っていると示される。二乗に対して、真実である菩薩・仏の四諦は、『涅槃經』の独自展開であろう。智顛にとって、

真実である仏・菩薩の四諦は、智顛自身の無生・無量・無作という四諦に関わっている。

ところで、『涅槃経』は四諦の中に、二乗の中智と仏・菩薩の上智があることが示される。仏・菩薩の上智には、四諦に対する無量の相が見られる。智顛は、この部分の『涅槃経』教説に基づいて、自分自身の無量四諦を説く。智顛の無量四諦を理解するために、以下、仏・菩薩の上智に観察される四諦が無量の相を持つことを『涅槃経』から検討する。

善男子よ、四聖諦を知るに二種の智有り、一には中、二には上なり。中とは声聞と縁覚の智なり。上とは、諸仏と菩薩の智なり。²⁶⁾

善男子よ、世諦を知る者、是れを中智と名づく。世諦を分別するに無量無辺にして不可称計なり、諸の声聞と縁覚の知る所に非ず、是れを上智と名づく。是の如き等の義は、我れは彼の経に於いて亦た之を説かず。善男子よ、一切行無常、諸法無我、涅槃寂滅なるは、是れ第一義なり、是れを中智と名づく。第一義は無量無辺にして、不可称計²⁷⁾なると知るは、諸の声聞と縁覚が知る所に非ず、是れを上智と名づく。

四諦における中智は、二乗の智慧であり、世諦を知ることである。四諦における上智は、仏・菩薩の智慧であり、世諦を分別して無量無辺の相があることが見られる。すなわち、四諦は無量の相を持っている。また、仏・菩薩の上智に対して、二乗の中智は、「一切行無常、諸法無我、涅槃寂滅」を第一義と考えている。仏・菩薩の上智は「第一義無量無辺不可称計」ということが知られる。

智顛の『四教義』の無量四諦は、「世諦を分別するに無量無辺にして不可称計なり、諸の声聞と縁覚の知る所に非ず」という説を採用して、自身

の別教の無量四諦とする。この説を別教の無量四諦とする重要な理由は、智顛の別教の教えが単純な菩薩法であり、二乗が理解できない法だからである。この点から見れば、『涅槃経』の二乗が分からない「無量相の四諦」は、智顛自身の別教の無量四諦と一致している。

また上記の通り、仏・菩薩の上智は「第一義無量無辺不可称計」ということが知られる。仏・菩薩の上智が知られる第一義は何であろうか。智顛は仏・菩薩の上智が知られる第一義に関する『涅槃経』の文脈によって、自分自身の無作四諦の意味を引き出している。このため、以下『涅槃経』の経文に沿って、検討する。

- ① 世諦とは、即ち第一義諦なりと。世尊よ、若し爾らば則ち二諦無けん
と。仏言わく、善男子よ、善方便有りて、衆生に随順して二諦有り
と説くのみ。善男子よ、若し言説に随わば則ち二種有り、一には世法、
二には出世法なり。善男子よ、出世の人の知る所の如きは、第一義諦
と名づく。世人の知るは、名づけて世諦と為すなり。(中略) 善男子よ、
名有り実無しとは、即ち是れ世諦なり。名有りて実有りとは、是れ第
一義諦²⁸⁾なり。
- ② 実諦とは、一道清浄にして、二有ること無きなり。善男子よ、常有り
楽有り我有り浄有る。是れ則ち名づけて実諦の義と為すと。文殊師利
は仏に白して言さく、世尊よ、若し眞実を以て実諦と為さば、眞実の
法は即ち是れ如来・虚空・仏性ならん。若し是くの如しとせば、如来・
虚空、及び仏性と差別有ること無けん。私は文殊師利に告げたまわ
く、苦有り諦有り実有り。集有り諦有り実有り。滅有り諦有り実有り。
道有り諦有り実有り。善男子よ、如来は苦に非ず諦に非ず、是れ実な
り。虚空は苦に非ず諦に非ず、是れ実なり。仏性は苦に非ず諦に非ず、
実なり²⁹⁾。

- ③ 文殊師利よ、言う所の苦とは無常相と為し、是れ可断の相なり、是れ実諦と為す。如来の性は、苦に非ず無常に非ず可断の相に非ず、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。復た次に善男子よ、言う所の集とは、能く五陰和合にして生ぜしむれば、亦た名づけて苦と為し、亦た無常と名づけ是れ可断相なり、是れを実諦と為す。善男子よ、如来は是れ集性なるに非ず是れ陰因なるに非ず可断の相に非ず、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。善男子よ、言う所の滅とは煩惱滅と名づけ、亦た常・無常なり。二乗の所得を名づけて無常と曰い、諸仏の所得、是れ則ち常と名づけ、亦た証法と名づけ、是れを実諦と為す。善男子よ、如来の性は名づけて滅と為さず、能く煩惱を滅し、常・無常に非ざれば、証知と名づけず。常住にして無変なり、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。善男子よ、道とは、能く煩惱を断ち、亦た常・無常にして是れ可修の法なり、是れを実諦と名づく。如来は、道にして能く煩惱を断つに非ず、常・無常にして、可修の法に非ず、常住不変に非ず、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。⁽³⁰⁾
- ④ 復た次に善男子よ、真実と言うは、即ち是れ如来なり、如来とは、即ち是れ真実なり。真実とは即ち是れ虚空なり、虚空とは即ち是れ真実なり。真実とは即ち是れ仏性なり、仏性とは即ち是れ真実なり。文殊師利よ、苦有り苦因有り苦尽有り苦対有り。如来は苦に非ず、乃至、対に非ず、是の故に実と為し、名づけて諦と為さず。虚空・仏性も亦た復た是の如し。苦とは、有為・有漏・無楽なり。如来は有為に非ず、有漏に非ず、湛然安楽なり。是れ実にして、諦に非ず。⁽³¹⁾

①は、世諦がすなわち第一義諦ということである。仏は衆生のため、二諦を説く。出世人が知られることは第一義諦である。世人が知られること

は世諦である。世人の世諦は名があり、実がない。出世人の第一義諦は名があり、実もある。すなわち、第一義諦は実諦を持っている。

②は、実諦とは常楽我浄ということである。もし真実を実諦であると言えば、真実の法は如来・虚空・仏性である。菩薩の四諦で諦理と真実があることに対して、仏の真実は、如来が非苦非諦であり、虚空が非苦非諦であり、仏性が非苦非諦である。以上のように、仏の四諦は如来・虚空・仏性という概念に転換した。

③は、二乗の四諦が「無常」を実諦とすることに対して、如来・虚空・仏性は、「常」を実諦とする。

④は、如来・虚空・仏性は、すべて真実ということである。二乗と菩薩の実諦に対して、仏の実諦は「楽」であり、二乗と菩薩の諦理ではない真実である。

智顛の無作四諦は上記の引用文を取り込んで理解されている。具体的などのようなこの部分の『涅槃経』の内容を無作四諦とするのか、智顛は説明していない。しかし、智顛の『四教義』で四諦を仏性・如来蔵という教説に転換することが見られる。

智顛は、『四教義』の中に、以上のような『勝鬘経』と『涅槃経』の四諦を読み込んで「四種四諦」説を展開している。以下には、智顛がどのように両経を背景として自身の「四種四諦」を形成しているかを検討していきたい。

第3章、智顛における「四種四諦」説

智顛の後期著作の中に、「四種四諦」に関する文がよく見出される。その中、『四教義』と『法華玄義』は「四種四諦」について詳細に説明している。『四教義』には、主に『勝鬘経』と『涅槃経』の四諦説によって、「四

種四諦」が理解されている。『法華玄義』には、『涅槃經』の四諦説に基づいて、自身の「四種四諦」が表明されている。その『法華玄義』では、『勝鬘經』の四諦を用いずに論じていることが注目される。³²⁾しかし、智顛の「四種四諦」については『勝鬘經』の四諦説を離れて議論することが難しい。なぜならば、智顛は『法界次第初門』で『勝鬘經』の有作四諦を藏教と通教の四諦と理解し、『勝鬘經』の有作と無作の二種四諦を別教と円教の四諦と理解しているからである。³³⁾さらに、『四教義』で『勝鬘經』の無作四諦と『涅槃經』の実諦を合わせて、自身の無作四諦と解釈している。³⁴⁾

以下、『四教義』巻第二の「四種四諦」を取り上げて、智顛がどのように両經によって自身の「四種四諦」を形成しているかを考察したい。

①、生滅四諦

初めに生滅四諦の理に約して、所詮を明かさば、即ち是れ因縁生滅にして以て諦理を明す。故に『法華經』に云く、昔波羅奈に於いて四諦の法輪を転じ、分別して諸法五衆の生滅を説く。生滅は即ち是れ作を起す、故に『勝鬘經』に有作の四聖諦を明かすなり。言う所の四諦とは、一に苦諦、二に集諦、三に滅諦、四に道諦なり。言う所の苦とは、逼切を義と為す。無常の三相、色心を逼切す、故に名づけて苦と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。言う所の集とは、招聚を義と為す。煩惱業合して、能く生死の苦果を招聚す、故に名づけて集と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。言う所の滅とは、滅無を義と為す、子果二縛有ること無し、故に名づけて滅と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。言う所の道とは、能通を義と為す、戒、定、智慧、能く通じて涅槃に至る、故に名づけて道と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。此れは是れ生滅の四諦なり。故に『涅槃經』に云く、声聞に苦有り苦

諦有り、集有り集諦有り、滅有り滅諦有り、道有り道諦有るなり。³⁵⁾

②、無生四諦

二に無生四諦を明かすとは、『思益經』に云うが如し、苦の無生を知るを苦聖諦と名づけ、集の和合相無きを知るを集聖諦と名づけ、不二の相を以て觀ずるを道聖諦と名づく。法は本より生せず、今は即ち滅無し、是れを滅聖諦と名づく。即ち苦集滅道の四法は、名字事相は是れ同じなるも、而れども諦の義に異なり有り。前は生滅の理を以て諦と為し、今は不生不滅の真空の理を明かして諦と為す。亦た四真諦と名づくるなり。故に『涅槃經』に云く、菩薩は苦を解して苦無し、是の故に苦無くして真諦有り。集を解して集無し、是の故に集無くして真諦有り。滅有り真有り道有り真有り。故に四真諦と名づくるなり。三乗は共に觀じて第一義を得、二種の涅槃を証す。亦た是の『勝鬘經』に有量の四諦を明かすなり。³⁶⁾

③、無量四諦

三に無量四聖諦を明かすとは、『大涅槃經』に説くが如し、諸陰の苦を知るを名づけて苦諦と為す。諸陰に無量の相有りて悉く是れ諸苦なりと分別す、是れを無量の苦諦、無量の集滅道と名づく。至下に當に經文を具出すべし。是の如き四諦の理は、『涅槃經』に云く、悉く声聞緣覺の知る所に非ず。³⁷⁾

④、無作四諦

四に無作四諦を明さば、『涅槃經』に明かすが如し、一実諦に約して四諦を辨ず、即ち是れ無作の四実諦なり。四実を明すも四と作らず、故に無作と名づく。四を觀じて即ち実を得、故に四実諦と名づくるなり。『涅槃經』に云く、言う所の苦とは、無常の相と為し、是れ可断の相なり。是れを実諦の如來の性と為す。苦に非ず、無常に非ず、可断相に非ず、是の故に実と為す。虚空仏性も亦た復た是くの如し。無

作の集滅道諦は、下に在りて当に『涅槃經』を具引すべし。此の文は即ち無作四実諦の明説なり。若し能く經に依り、此の四諦は、即ち一実諦なりと解すれば、是れを円教所詮の理と為す。『勝鬘經』に無作の四諦を明かすも一実の結成無し。『涅槃經』は無作と云わず、皆一実を用って四諦を結成す。義既に相関す。今兩經を合して名を立つ。故に無作の四実諦と云うなり。⁹⁸

『四教義』における「四種四諦」の解釈では、智顛は四種において『涅槃經』の經文を引用している。また、無量四諦以外の生滅四諦・無生四諦・無作四諦について述べる際には、『勝鬘經』の經文を引用している。さらに、智顛は『勝鬘經』の有作四諦を自身の生滅四諦に対応させ、『勝鬘經』の有量四諦を自身の無生四諦に対応させ、『勝鬘經』の無作四諦と『涅槃經』の一実諦を合わせて取り上げ、自身の無作四諦の意味に配当する。『四教義』に、智顛は『勝鬘經』の四諦の名称だけ取り上げて、自身の「四種四諦」に配当した説明をしている。『四教義』で『勝鬘經』の有作四諦と有量四諦は、智顛自身の生滅四諦と無生四諦に関係することが説明されていない。⁹⁹しかし、智顛は『勝鬘經』の如来藏を『涅槃經』の仏性と同様に理解している。『勝鬘經』では、如来藏によって無量四諦があるとされている。『涅槃經』では、仏性を理解している仏・菩薩は無量相の四諦が見られる。これにしたがって、『勝鬘經』の無量四諦と『涅槃經』の「無量相の四諦」、及び智顛自身の無量四諦は、同様に如来藏・仏性を認識できる。『四教義』で智顛は問答の形で次の通り説明している。

問うて曰く、若し爾らば、『涅槃經』に四諦の無量相を明す。何んぞ定めて是れ別教所詮の無量の四諦と知ることを得るや。

答えて曰く、若し仏性を明かさずして無量を説かば、即ち是れ前の

二教所詮の無量なり。若し仏性を明して無量の相を説かば、即ち任運に自ら成じ、後の兩教の明す所の無量なり。若し円教も亦た無量の四聖諦と名づくるとは、即ち是れ無作の四実諦の異名なり。⁽⁴⁰⁾

設問は次のとおりである。

もし『涅槃經』は「四諦無量相」を明らかにするのであれば、いかに、別教で説かれる無量四諦のことであると明確に知ることができるであろうか。

智顓の返答は、次の通りである。

もし仏性ということを明かさずに、無量であると説けば、これは前の二教に説かれる無量である。もし仏性ということ明かして、無量ということ説けば、これは後の二教に説かれる無量である。もし円教を無量四諦と名づければ、すなわち、これは無作四諦の異名である。

以上のように、智顓は『涅槃經』の仏性ということによって、無量四諦を定義する。智顓の無量四諦では、如来蔵と仏性が見えることは、重要である。さらに、元々智顓の「四種四諦」において、円教の四諦は無作四諦であるが、何故ここで智顓は円教の無量四諦を言及しているのだろうか。次の問答で智顓の考え方をみよう。

問うて曰く、『勝鬘經』に無量の四聖諦、無作の四聖諦を明す。『涅槃經』も亦た是の説有り。二処の經文は、同じと為すや異なると為すや。

答えて曰く、無量の四聖諦有り、蔵識に依ると雖も無作に非ず。無量の四聖諦有り、亦た蔵識に依り即ち是れ無作なり。所以は何ん、若し無明恒沙に約さば、四諦の法事、数論は無量なり。即ち是れ別教所詮の無量にして無作に非ず。若し法性に約して四諦の無量を明かさば、

即ち是れ円教所詮の無量なり。無量は即ち無作なり。『涅槃經』に迦葉に答えて、無量の四諦を明かさば、正しく事数無量に約す。此れ別教の所詮なり。若し文殊に答えて四諦を明かさば、即ち是れ無作の四実諦を明かすなり。『勝鬘經』に二種四諦を明かすは、一異未だ定めて判ずべからず⁽⁴⁾。

設問は、次の通りである。

『勝鬘經』の中に、無量四諦と無作四諦を明かしており、『涅槃經』にも同様の説がある。両經の文は同じかどうかということである。

智顛の返答は、次の通りである。

如来蔵によって、無作四諦と無量四諦がある。無明恒沙の煩惱という点によって、四諦を論じると、無量四諦である。これは別教の無量四諦であり、無作四諦ではない。法性によって、四諦を明かすと、円教の無量四諦であり、円教の無量四諦は、すなわち無作四諦である。『涅槃經』には、仏が迦葉に答える文は、四諦の「正しく事数無量に約す」に対して、別教の無量四諦を明かしている。仏が文殊に答える文は、無作四実諦であり、すなわち円教の無作四諦である。

智顛の理解は、『涅槃經』の中、如来蔵によって無作四諦と無量四諦があり、無明煩惱によって四諦を明かす無量四諦は、別教の無量四諦である。法性によって、四諦を明かす無量四諦は、円教の無作四諦である。こうして、智顛は『涅槃經』の無量四諦を二種の四諦と理解している。『涅槃經』で文殊菩薩に答えた無量四諦は智顛が考えている無作四諦である。智顛は『勝鬘經』の無作四諦を自身の無作四諦と考えていない。

智顛は『勝鬘經』の無作四諦に対して、その四諦の部分的な意味を取り上げて、自身の無作四諦に相当させる。言い換えれば、『勝鬘經』の無作四諦は、完全に、智顛自身の無作四諦を顕すには不十分と言える。『四教義』

に、智顛は『勝鬘經』の無作四諦の意味を用いていたが、智顛自身の無作四諦としては理解し難い。

『四教義』の時代は、智顛の教相判釈が円融に完成した頃であり、化法四教の藏教・通教・別教・円教の教理を完成させるため、「四種四諦」を創立させたことが分かる。『涅槃經』の經文は智顛の「四種四諦」の意味に対応している。また、「四種四諦」の名称は『勝鬘經』の四諦を参照していると言える。しかし、『勝鬘經』の四諦は智顛の「四種四諦」に完全に当て嵌めることができず、『勝鬘經』の中に、智顛の「四種四諦」に相当する經文もない。そのため、智顛は『勝鬘經』と『涅槃經』の両經の四諦説を取り入れて自身の「四種四諦」としている。

おわりに

『勝鬘經』の四諦説は、如来藏思想の上で二乗・最後身の菩薩・仏の四諦を区分している。二乗・最後身の菩薩の四諦は、有作と有量四諦である。仏の四諦は、二面がある。一面は空如来藏が究竟した無作四諦である。一面は不空如来藏が顕した無量四諦である。

『涅槃經』の四諦説は、仏性思想の上で凡夫・二乗・菩薩・仏の四諦を区分している。凡夫は有漏の苦と集があり、諦理がない。二乗の四諦は有漏の苦諦と集諦があり、無漏の滅諦と道諦があり、仏・菩薩の眞実がない。菩薩の四諦は、有漏の苦と集がなくなった、無漏の滅諦と道諦があり、諦理と眞実もある。仏の四諦は、常樂我淨である仏性を意味する。

結論すると、智顛は『勝鬘經』の四諦説を理解した上で、『涅槃經』の仏性思想の四諦説を受けて自身の「四種四諦」を形成している。

智顛の生滅と無生四諦は、『勝鬘經』の有作と有量四諦に相応し、『涅槃經』の二乗と菩薩の四諦に相応していると理解できる。

『勝鬘經』は如来藏思想にしたがって、無作四諦と無量四諦を一種四諦と認めている。『涅槃經』では、二乗の中智は無量の相がある四諦を分かっていないが、仏・菩薩の上智はわかっている。智顛は『勝鬘經』の無作・無量四諦と『涅槃經』の無量四諦をすべて自身の無量四諦に所属させている。智顛の無作四諦は『勝鬘經』の無作四諦を用いずに、『涅槃經』の仏性の立場から説かれた四諦を採用して、自身の無作四諦とする。

『勝鬘經』には、智顛の「四種四諦」に相応する経文が見られない。また『涅槃經』の中には、「四種四諦」の名称が見られない。そこで智顛は『四教義』において、『涅槃經』と『勝鬘經』の両經を用いて、自身の「四種四諦」を説明している。つまり、『四教義』では、『勝鬘經』の四諦の名称を取り上げて、藏教・通教・別教・円教の四教が所詮する四諦を説明している。このように、智顛は自身の「四種四諦」を創立したと言えよう。

注

- (1) 『四教義』卷二「有四種四諦。一生滅四諦、二無生四諦、三無量四諦、四無作四諦也。問曰：何處經論出此四種四諦。答曰：若散說諸經論趣緣處處有此文義、但不聚在一處耳。大涅槃經明慧聖行、欲爲五味譬本。是以次第分別、明此四種四諦。勝鬘亦有四種四諦之文。所謂有作四諦、有量四諦、無作四諦、無量四諦。但涅槃勝鬘明無量四諦、詮次不同義意少異。」(『大正藏』T46, 725b) 『法華玄義』卷二下「四種四諦者。一生滅、二無生滅、三無量、四無作。其義出涅槃聖行品。」(『大正藏』T33, 700c)。
- (2) 淨影慧遠は、『大乘義章』の中で行ずることに約すれば、小乗の有作四諦と大乘の無作四諦があり、法に分別すれば、小乗の有量四諦と大乘の無量四諦があると述べている。(『大正藏』T44, 515a)。
- (3) 鹽入(1964)。
- (4) 加藤(1990)。
- (5) 斎藤(1991)。
- (6) 二種の四諦：作四諦と無作四諦。
- (7) 『勝鬘經』「阿羅漢、辟支仏、最後身菩薩、爲無明住地之所覆障故、於彼彼法不知不覺。以不知見故、所應斷者、不斷不究竟。以不斷故、名有余過解脫。非離一切過解脫、名有余清淨。非一切清淨、名成就有余功德。非一切功德。以成

- 就有余解脱、有余清淨、有余功德故、知有余苦、断有余集、証有余滅、修有余道。是名得少分涅槃。得少分涅槃者、名向涅槃界。若知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道、於無常壞世間、無常病世間、得常住涅槃。於無覆護世間、無依世間、為護、為依。何以故、法無優劣故得涅槃、智慧等故得涅槃、解脱等故得涅槃、清淨等故得涅槃。是故、涅槃一味等味、謂解脱味。」(『大正藏』 T12, 220a25-220b12)。
- (8) 『勝鬘經』「初聖諦智、非究竟智、向阿耨多羅三藐三菩提智。世尊。聖義者、非一切声聞緣覺。声聞緣覺成就有量功德。声聞緣覺成就少分功德、故名之為聖。聖諦者。非声聞緣覺諦、亦非声聞緣覺功德。世尊。此諦如來應等正覺初始覺知。然後為無明藏(殼)世間開現演說、是故名聖諦。」(『大正藏』 T12, 221a29-221b7)。
- (9) 『勝鬘經』「聖諦者說甚深義、微細難知。非思量境界、是智者所知。一切世間所不能信、何以故。此說甚深如來之藏。如來藏者、是如來境界、非一切声聞緣覺所知。如來藏處、說聖諦義。如來藏處甚深故、說聖諦亦甚深。微細難知、非思量境界。是智者所知、一切世間所不能信。」(『大正藏』 T12, 221b9-b15)。
- (10) 『勝鬘經』「若於無量煩惱藏所縛如來藏、不疑惑者、於出無量煩惱藏法身、亦無疑惑。於說如來藏、如來法身不思議仏境界及方便說、心得決定者、此則信解說二聖諦。如是難知難解者、謂說二聖諦義。何等為說二聖諦義、謂說作聖諦義、說無作聖諦義。」(『大正藏』 T12, 221b17-b22)。
- (11) 『勝鬘經』「說作聖諦義者、是說有量四聖諦。何以故、非因他、能知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道。是故、世尊、有為生死無為生死。涅槃亦如是、有余及無余。說無作聖諦義者、說無量四聖諦義。何以故、能以自力、知一切受苦、断一切受集、証一切受滅、修一切受滅道。如是八聖諦、如來說四聖諦。如是四無作聖諦義、唯如來・應等正覺、事究竟、非阿羅漢辟支仏事究竟、何以故、非下中上法得涅槃。何以故、如來・應等正覺、於無作四聖諦義事究竟。以一切如來・應等正覺、知一切未來苦、断一切煩惱上煩惱、所撰受一切集、滅一切意生身、除一切苦滅作証。世尊、非壞法故、名為苦滅。所言苦滅者、名無始・無作・無起・無尽・離尽・常住・自性清淨、離一切煩惱藏。世尊、過於恒沙不離・不脫・不異・不思議仏法成就、說如來法身。世尊、如是如來法身、不離煩惱藏名如來藏。」(『大正藏』 T12, 221b23-221c11)。
- (12) 原文の「非因他、能知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道」の「因他」は、二乗が恐怖のため、仏の保護を求めるので、「因他」と言う。唐・菩提流志訳『大宝積經』で「由他護故、而不能得知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道」と訳していることと意味は同じである。
- (13) 恐怖がない、保護を求めない心によって、四聖諦を理解することである。唐・

菩提流志訳『大宝積経』に「能自護故、知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道。」とあると、意味が同じである。

- (14) 『勝鬘経』「法身章」で作と無作の四諦に説いている時、空と不空如来蔵には言及していないが、空と不空如来蔵について説いている「空義隱覆真實章」で恒沙より多くの不思議仏法を持っている不空如来蔵の意味と一致している。
- (15) 『勝鬘経』「世尊、有二種如来蔵空智。世尊、空如来蔵、若離、若脱、若異、一切煩惱蔵。世尊、不空如来蔵、過於恒沙、不離・不脱・不異・不思議仏法。世尊、此二空智、諸大声聞、能信如来。一切阿羅漢辟支仏空智、於四不顛倒境界轉。是故、一切阿羅漢辟支仏、本所不見、本所不得。一切苦滅、唯仏得証。壞一切煩惱蔵、修一切滅苦道。」(『大正蔵』 T12, 221c16-c23)。
- (16) 唐・菩提流志訳『大宝積経』に「不空如来蔵、具過恒沙仏解脱智不思議法。」とあることと、意味が同じである。
- (17) 『大正蔵』 T46, 726a13-a15。
- (18) 『涅槃経』「諸凡夫人有苦無諦、声聞縁覚有苦有苦諦、而無真實。諸菩薩等、解苦無苦。是故無苦、而有真諦。諸凡夫人有集無諦。声聞縁覚有集有集諦。諸菩薩等解集無集。是故無集、而有真諦。声聞縁覚有滅非真。菩薩摩訶薩有滅有真諦。声聞縁覚有道非真。菩薩摩訶薩有道有真諦。」(『大正蔵』 T12, 441a11-a17)。
- (19) 『涅槃経』の「苦諦」の「苦」は八苦ということで概説している。原文「復次、善男子。八相名苦、所謂生苦老苦病苦死苦愛別離苦怨憎会苦求不得苦五盛陰苦。能生如是八苦法者、是名為集。」(『大正蔵』 T12, 435a3-a5)。
- (20) 『涅槃経』の論理で二乗は、凡夫に比べて苦諦の真理があるが、菩薩に比べて、このような真理が真實の真理ではない。智顛は「諦」を空と理解している。二乗が理解した空は析空ということである。菩薩が理解した空は、体空ということである。
- (21) 『大正蔵』 T12, 440a22。
- (22) 菩薩の愛(集)は、実諦ということである。なぜなら、菩薩は衆生のため、三有に生まれ、凡夫と同じな愛(集)ではない。(『大正蔵』 T12, 440a22)。
- (23) 『涅槃経』「無漏果者則名為滅。」(『大正蔵』 T12, 435a2)。
- (24) 『涅槃経』「無漏因者則名為道。」(『大正蔵』 T12, 435a2)。
- (25) 『涅槃経』「善男子、云何菩薩摩訶薩、住於大乘大般涅槃、見滅、見滅諦。所謂断除一切煩惱。若煩惱断則名為常。滅煩惱火則名寂滅。煩惱滅故、則得受樂。諸仏菩薩求因縁故、故名為淨。更不復受二十五有故、名出世。以出世故、故名為我。常於色聲香味触等、若男、若女、若生・住・滅、若苦、若樂、不苦不樂不取相貌故、名畢竟寂滅真諦。善男子、菩薩如是住於大乘大般涅槃觀滅聖諦。

- 善男子、云何菩薩摩訶薩、住於大乘大般涅槃觀道聖諦。善男子、譬如闇中因燈得覓細之物。菩薩摩訶薩亦復如是、住於大乘大般涅槃、因八聖道見一切法、所謂常・無常、有為・無為、有衆生・非衆生、物・非物、苦・樂、我・無我、淨・不淨、煩惱・非煩惱、業・非業、實・不實、乘・非乘、知・無知、陀羅驪・非陀羅驪、求那・非求那、見・非見、色・非色、道・非道、解・非解。善男子、菩薩如是住於大乘大般涅槃觀道聖諦。」(『大正藏』T12, 441a18-441a27)。
- (26) 『涅槃經』「善男子、知四聖諦有二種智、一者中二者上。中者聲聞緣覺智。上者、諸仏菩薩智。」(『大正藏』T12, 442b22-b24)。
- (27) 『涅槃經』「善男子、知世諦者、是名中智。分別世諦無量無辺不可稱計、非諸聲聞緣覺所知、是名上智。如是等義、我於彼經亦不說之。善男子、一切行無常、諸法無我、涅槃寂滅、是第一義、是名中智。知第一義無量無辺、不可稱計、非諸聲聞緣覺所知、是名上智。」(『大正藏』T12, 442c29-443a5)。
- (28) 『涅槃經』「世諦者、即第一義諦。世尊、若兩者則無二諦。仏言、善男子、有善方便、隨順衆生說有二諦。善男子、若隨言說則有二種、一者世法、二者出世法。善男子、如出世人之所知者、名第一義諦。世人知者、名為世諦。(中略)善男子、有名無実者、即是世諦。有名有実者、是第一義諦。」(『大正藏』T12, 443a11-a15)。
- (29) 『涅槃經』「実諦者、一道清淨、無有二也。善男子、有常有樂有我淨。是則名為実諦之義。文殊師利白仏言、世尊、若以真實為実諦者、真實之法即是如來・虚空・仏性。若如是者、如來・虚空、及与仏性無有差別。仏告文殊師利、有苦有諦有実。有集有諦有実。有滅有諦有実。有道有諦有実。善男子、如來非苦非諦、是実。虚空非苦非諦、是実。仏性非苦非諦、是実。」(『大正藏』T12, 443b25-c4)。
- (30) 『涅槃經』「文殊師利、所言苦者為無常相、是可断相、是為実諦。如來之性、非苦非非常非可断相、是故為実。虚空・仏性亦復如是。復次善男子、所言集者、能令五陰和合而生、亦名為苦、亦名無常是可断相、是為実諦。善男子、如來非是集性非是陰因非可断相、是故為実。虚空仏性亦復如是。善男子、所言滅者名煩惱滅、亦常無常。二乘所得名曰無常、諸仏所得、是則名常、亦名証法、是為実諦。善男子、如來之性不名為滅、能滅煩惱、非常無常、不名証知、常住無變、是故為実。虚空・仏性亦復如是。善男子、道者、能断煩惱、亦常無常是可修法、是名実諦。如來、非道能断煩惱、非常無常、非可修法、常住不變、是故為実。虚空・仏性亦復如是。」(『大正藏』T12, 443c5-c19)。
- (31) 『涅槃經』「復次善男子、言真實者、即是如來、如來者、即是真實。真實者即是虚空、虚空者即是真實。真實者即是仏性、仏性者即是真實。文殊師利、有苦有苦因有苦尽有苦對。如來非苦、乃至、非對、是故為実、不名為諦。虚空・仏性亦復如是。苦者、有為・有漏・無樂。如來非有為、非有漏、湛然安樂。是実、

- 非諦。」(『大正藏』T12, 443c 19-c25)。
- 32 『法華玄義』「有師解。勝鬘無辺聖諦。(中略)雖唱四名但成二義。非今所用。」(『大正藏』T33, 700c18)。
- 33 『法界次第初門』「若是三藏教通教。所明弘誓。但緣有作四聖諦而起。若是別教円教。所明弘誓。通緣有作無作二種四聖諦而起。」(『大正藏』T46, 686a12)。
- 34 『四教義』「四明無作四諦者、如涅槃經明、約一實諦而辨四諦、即是無作四實諦。明四實不作四、故名無作。觀四即得實故名四實諦也。涅槃經云、所言苦者、為無常相、是可斷相。是為實諦如來之性。非苦、非無常、非可斷相、是故為實。虛空仏性亦復如是。無作集滅道諦、在下當具引涅槃經。此文即無作四實諦之明說也。若能依經、解此四諦即一實諦。是為円教所詮之理。勝鬘經明無作四諦。無一實結成。涅槃經不云無作、皆用一實結成四諦。義既相関、今合兩經立名、故言無作四實諦也。」(『大正藏』T46, 726b5-b16)。
- 35 『四教義』「初約生滅四諦之理。明所詮者、即是因緣生滅以明諦理。故法華經云、昔於波羅奈軛四諦法輪。分別說諸法五衆之生滅。生滅即是起作、故勝鬘經明有作四聖諦也。所言四諦者、一苦諦、二集諦、三滅諦、四道諦也。所言苦者、逼切為義。無常三相逼切色心、故名為苦。審實不虛、名之為諦。所言集者、招聚為義。煩惱業合、能招聚生死苦果、故名為集。審實不虛、名之為諦。所言滅者、滅無為義。無有子果二縛、故名為滅。審實不虛、名之為諦。所言道者、能通為義。戒定智慧、能通至涅槃、故名為道。審實不虛、名之為諦。此是生滅四諦。故涅槃經云、聲聞有苦有苦諦。有集有集諦。有滅有滅諦、有道有道諦也。」(『大正藏』T46, 725c14-c27)。
- 36 『四教義』「二明無生四諦者。如思益經云、知苦無生名苦聖諦、知集無和合相名集聖諦、以不二相觀名道聖諦。法本不生、今即無滅、是名滅聖諦。即苦集滅道四法、名字事相是同、而諦義有異。前以生滅之理為諦、今明不生不滅真空之理為諦。亦名四真諦也。故涅槃經云、菩薩解苦無苦、是故無苦而有真諦。解集無集、是故無集而有真諦。有滅有真有道有真、故名四真諦也。三乘共觀得第一義、証二種涅槃。亦是勝鬘經明有量四諦也。」(『大正藏』T46, 726a5-a15)。
- 37 『四教義』「三明無量四聖諦者、如大涅槃經說、知諸陰苦名為苦諦、分別諸陰有無量相悉是諸苦、是名無量苦諦。無量集滅道、至下當具出經文。如是四諦之理、涅槃經云、悉非聲聞緣覺所知。」(『大正藏』T46, 726a21-a25)。
- 38 『四教義』「四明無作四諦者、如涅槃經明、約一實諦而辨四諦、即是無作四實諦。明四實不作四故名無作。觀四即得實、故名四實諦也。涅槃經云、所言苦者、為無常相、是可斷相。是為實諦如來之性。非苦、非無常、非可斷相、是故為實。虛空仏性亦復如是。無作集滅道諦、在下當具引涅槃經。此文即無作四實諦之明說也。若能依經、解此四諦、即一實諦、是為円教所詮之理。勝鬘經明無作四諦、

無一実結成。涅槃經不云無作、皆用一実結成四諦。義既相関。今合兩經立名。故言無作四実諦也。」(『大正藏』T46, 726b5-b16)。

- (39) 『勝鬘經』の有作四諦と有量四諦は、三界外の二乗と最後身菩薩が知っている四諦である。智顛の生滅四諦と無生四諦は、三界内の二乗と菩薩の四諦である。
- (40) 『四教義』「問曰、若爾涅槃經明四諦無量相。何得定知是別教所詮無量四諦。答曰、若不明仏性而説無量、即是前二教所詮之無量也。若明仏性説無量相者、即任運自成、後兩教所明無量也。若円教亦名無量四聖諦者、即是無作四実諦之異名也。」(『大正藏』T46, 726a28-b4)。
- (41) 『四教義』「問曰、勝鬘經明無量四聖諦、無作四聖諦。涅槃經亦有是説。二処經文、為同為異耶。答曰、有無量四聖諦、雖依藏識非無作。有無量四聖諦、亦依藏識即是無作。所以者何、若約無明恒沙四諦法事、数論無量。即是別教所詮無量非無作。若約法性明四諦無量、即是円教所詮無量。無量即無作也。大涅槃經答迦葉、明無量四諦、正約事数無量、此別教所詮也。若答文殊明四諦、即是明無作四実諦也。勝鬘經明二種四諦、一異未可定判。」(『大正藏』T46, 726b16-b26)。

参考文献

加藤勉

[1990]「四種四諦の成立過程について」『多田厚隆先生頌寿記念 天台教学の研究』山喜房佛書林、197-210。

斎藤章光

[1991]「四種四諦における問題点について」『印度学仏教学研究』39(2)、604-606。

佐藤哲英

[1961]『天台大師の研究』百華苑。

鹽入良道

[1964]「天台義における四諦について」『印度学仏教学研究』12(2)、583-591。

藤井教公

[1981]「天台智顛における「如来蔵」の語の意味」『印度学仏教学研究』30(1)、339-343。

[1982]「『勝鬘經』の世界－中国如来蔵思想史研究の手がかり－」『横浜市立大学論叢』34(1)、25-49。

[1988]「天台智顛における『涅槃經』の受容とその位置づけ-1-」『大倉山論集』(23)、41-74。

- [1988] 「天台智顓における『涅槃経』の受容とその位置づけ -2-」『大倉山論集』(24)、145-189。
- [1990] 「天台智顓における『涅槃経』の受容とその位置づけ -3-」『大倉山論集』(27)、165-195。
- [2013] 「天台智顓と大乘『涅槃経』」『叡山学院研究紀要』(35)、108-126。
- 若杉見竜
- [1981] 「法華玄義成立についての一考察」『棲神』53、61-70。

ジー ウェンジェ
(JI WENJIE 大谷大学大学院文学研究科博士後期課程第三学年 仏教学専攻)